

共同的関わりの視点による母子相互作用の分析

清水光弘*¹ 金光義弘*¹

はじめに

Stern (1977)¹⁾ が明らかにした乳児と母親との間で交わされる視線や声のやりとりに見られる相互的な協応や同期性を, Trevarthen (1979)²⁾ は相互主体性という概念で捉えた。これらの視点には, 幼い乳児であっても母親とのやりとりの形成に対して主体的な関与をしていることが示されている。母子間の調和した相互作用は, 母子双方の相手に対する反応によって成立するのであるが, 乳幼児期においては, その展開を調整する役割は主に母親の側にある (Adamson, Bakeman & Deckner, 2004)³⁾。その役割を適切に果たす母親の特性は社会的随伴性, 応答性, 適切性などと呼ばれ, それらはその後の子どもの認知発達と密接に関連することが分かっている (Dunham & Dunham, 1990; Pomerleau, Scuccimarri & Malcuit, 2003)^{4,5)}。

対照的に, 親側の役割が不適切に実行されている極端な例は虐待事例に見られる。Cerezo & D'Ocon (1995)⁶⁾ は, 虐待的な親は子どもの好ましくない行動 (例えば, 騒ぎ立てる) に対して叱責などによって選択的に反応することが多いことを見出した。その結果, 子どもの好ましくない行動は強化され, 親子間のやりとりは次第に威圧的となり, 虐待エピソードへと発展するという仮説を提起した。Milner (2003)⁷⁾ は, 身体的虐待をする親は子どもが素直でない行動をするものであると予期しているために, 子どもが親から望まれている行動をしようとするには気づかず, 好ましくない行動だけを選択的に観察するという社会的情報処理モデルを提唱している。虐待事例は特異な相互作用であるが, 相互作用の不調和は決して特異なことではない。例えば, Crowell, Feldman & Ginsberg (1988)⁸⁾ は, 幼児期においては反抗, かんしゃく, 攻撃行動, 引っ込み思案, 分離不安などの問題行動が一般的に見られ, それらの問題行動は母子間の相互作用に不調をもたらす可能性があるとして述べている。

ところで, 乳児期から幼児期の移行期である1歳

の中頃には, 運動面, 認知面, 言語面における発達が顕著である。しかし, 同時にこの時期は親にとって対応の困難性が増す, あるいは困難性の質がそれまでとは変化するときでもある。例えば, この時期には Crowell *et al.* (1988)⁸⁾ が列挙した問題行動が生じ始める。また, 子どもの泣きと食事に関する親の悩みが著しく増加するときでもあるが, ほとんどの親はこの困難を乗り越えていくのに対して, 一部においては, その後の母子関係の不調のきっかけになる場合もある (Rosenblum, 2004)⁹⁾。

このように母子相互作用が調和的であるかないかを見分ける視点は, 子どもの発達時期によって異なると考えられる。そこで, 本研究の第一の目的は, 早期発達において発達の転換的な意味をもつ乳児期から幼児期への移行期の子どもと, その母親との相互作用を検討の対象とすることである。その際, 相互作用中の母子双方の主体的関与と, 1歳後半の子どもの発達の特徴のいずれをも捉えることのできる視点として, 共同的関わり (joint engagement) (Adamson *et al.*, 2004)³⁾ という概念を用いた。共同的関わりとは, 一定の持続時間をもって子どもが注意を他者と対象に配分しながら, 他者ととも共通の対象と関わる状態のことを言う。この概念には, 相手に対する気づきの問題を組み込み, 乳児-物-母親というこの時期の発達の特徴である三項関係の様相全体を把握しようとする優れたアイデアと内容が含まれている (大藪, 2004)¹⁰⁾。ただ, この定義からも分かるように, ある行動が共同的関わりであるかどうかは前後の行動 (母子双方における視線の方向やおもちゃの操作) や文脈によって決まり, その判定は決して容易ではないと考えられる。そこで本研究では, Carpenter, Nagell & Tomasello (1998)¹¹⁾ を参考に, 母子の視線の方向と相手の注意を方向付ける身振り行動を記録し, それらの組み合わせから反応を時系列的に捉えることによって, 一連の行動が共同的関わりであるかどうかを判断するという方法を試みた。さらに, 母子の反応を時系列的に記録し分析するという方法によって, 相互作

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 清水光弘 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

用の調和性ないし不調和性を明らかにすることができるのかどうかを検討した。

方 法

1. 観察対象者

K市保健所の1歳6ヶ月健康診査会場において、本研究への参加者を募ったところ、23組の母子の応募があった。すべての子どもについて健康診査の結果は異常なしであった。分析対象となる観察場面の基準(後述)を満たした母子は、そのうち4組であった¹¹⁾。今回は、そのうちの2組(以下、母子#1、母子#2とする)を観察対象者とした。この2組の選定に際しては、母親の子どもに対する関わり方が能動的であった(母子#1)か、そうではなかった(母子#2)かという基準を設けた。

分析対象となる相互作用は、2組の母子に共通して約2ヶ月の間をあけて録画された2場面である。母子#1、#2の子どもの初回観察時年齢は、それぞれ1歳10ヶ月(男児)と1歳9ヶ月(女児)であった。

2. 観察場面

川崎医療福祉大学臨床心理学科集団療法室において、およそ2週間間隔で10回の観察が行われた。1回の観察時間は1時間30分であった。室内での母子の行動が、隣の観察室からビデオ録画された。室内には、この年齢の子どもに適したおもちゃ類が用意され、一人の保育士が誘導的な遊びを取り入れ、自然な遊び場面になるよう工夫された。

分析対象とする場面は、当該母子が他の母子から独立して1分以上続くやりとりをしている状況という基準を満たした4場面であった。すなわち、母子#1の1回目と2回目はそれぞれ3分25秒、3分22秒であり、母子#2の場合はそれぞれ3分23秒、4分14秒であった。

3. 観察カテゴリー

Carpenter *et al.* (1998)¹¹⁾ にしたがって、観察カテゴリーは視線の方向として、同じ対象の同時注視、相手を見る、無関与という3つのカテゴリー、そして、相手の注意や行動を方向付ける活動について、叙述的身振りというカテゴリーが設定された。同時注視や相手を見るというカテゴリーについて、母子の視線の正確な方向を見定めることが困難な場合があった。そこで、実験室的厳密さより生態学的妥当性を優先させた Van Egeren, Barratt & Roach (2001)¹²⁾ にしたがって、相手や対象の方向を見ている行動をもって「～を見ている」と見なした。

それぞれのカテゴリーの定義は以下の通りである。

①同時注視：子どもと母親が同じ物ないし人を見ている。②無関与：A. 子どもが周囲を見ている

が、特定の人や物を見ていない。B. 母親が周囲を見ているが、特定の人や物を見ていない。③相手を見る：A. 子どもが母親を見る。B. 母親が子どもを見る。④叙述的身振り1：A. 子どもから母親への物の提示ないし手渡し。B. ④のA. に応じた母親の反応。⑤叙述的身振り2：A. 母親から子どもへの物の提示ないし手渡し。B. ⑤のA. に応じた子どもの反応。

4. コーディング

上記のカテゴリーに基づいて、行動記録分析装置(マイクロメイト岡山社製)を用いてマイクロ分析を行った。各カテゴリー事象の生起の確認、判定に当たっては、臨床心理学の学生2名による協議に基づいて行われた。

結 果

観察時間に占める各カテゴリーの累積生起時間の割合を表1に示した。2組の相互作用の違いがいくつかのカテゴリーに見られる。すなわち、1回目の観察の同時注視の割合が、母子#1は母子#2より多い。それに対して、無関与は1回目には母子#2が母子ともに、2回目には母親が多いものの、2回目の同時注視は2組ともに近い値を示している。叙述的身振り2の2回目の数値を見ると、母子#2では数値が一致し、量も母子#1より多い。これらの数値から、母子#2において相互作用の調和性が成立していることが示唆される。

表1 観察時間に占める各カテゴリーの累積生起時間の割合

	同時注視	無関与		相手を見る		叙述的身振り1		叙述的身振り2	
		子	母	子→母	母→子	子→母	母→子	母→子	子→母
母子1									
1回目	15.6	3.0	0.1	0.0	18.2	1.0	1.4	6.2	3.1
2回目	22.0	6.6	4.4	2.7	9.6	0.4	0.2	6.2	1.6
母子2									
1回目	1.5	58.1	43.8	0.0	8.2	0.0	0.0	0.7	0.0
2回目	27.0	3.9	26.1	1.2	2.3	1.0	1.1	7.9	7.9

単位：%

2組の母子間には、その他のカテゴリーにおいてもいくつか差が見られたので、それを相互作用の展開様相として把握するために、1回目と2回目の観察における母子#1、#2の相互作用の一部のマイクロ分析結果を、図1に示した。上記の2回目の叙述的身振り2について見てみると、マイクロ分析では、母子#2の叙述的身振り2のやりとりは集中して生起し、しかも、その前後に無関与が認められた。つまり、表1から推測されたような調和性が成立しているとは言い切れない。このことは、相手を見るにおいても示されている。すなわち、母子#1の子

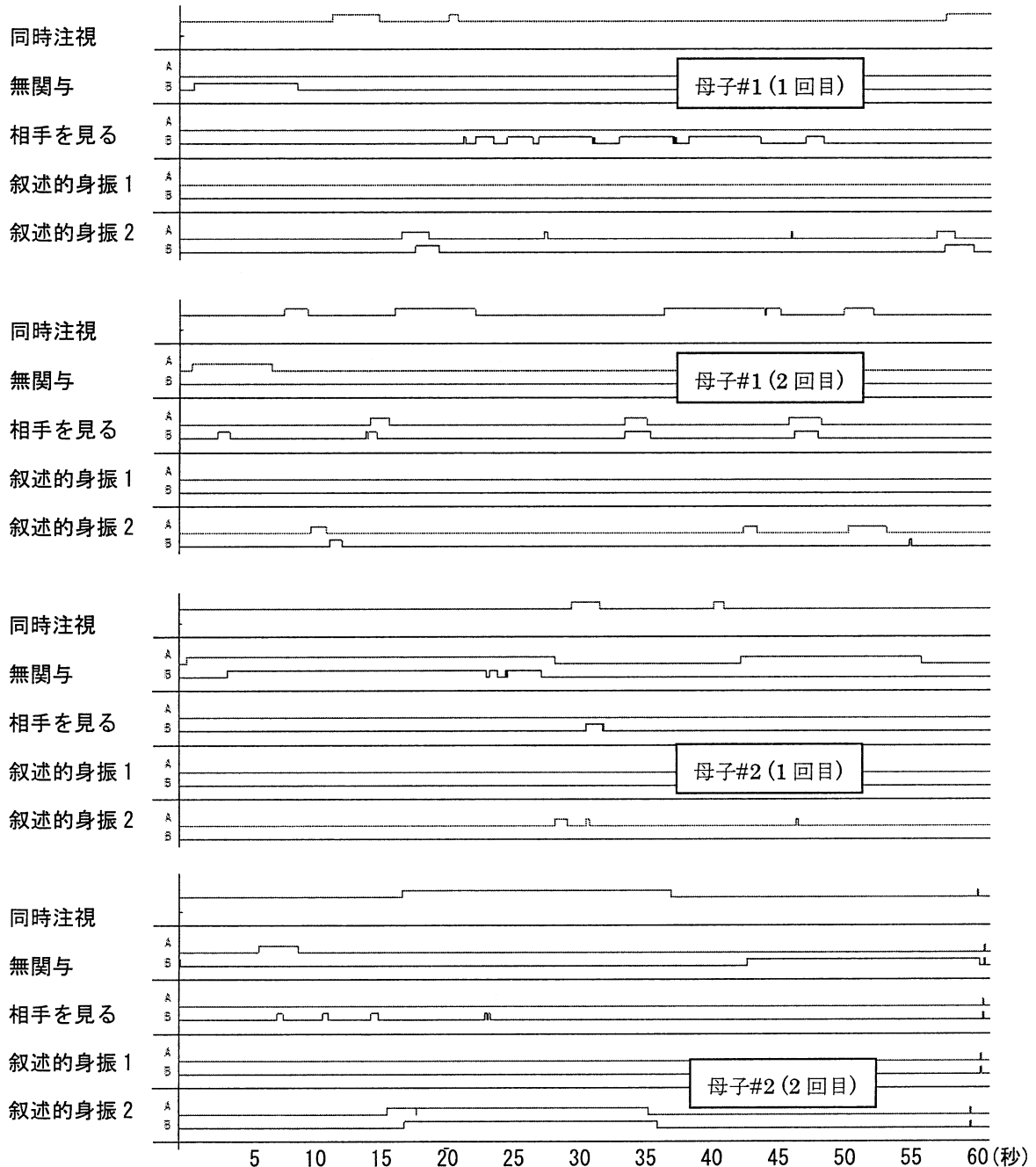


図1 母子#1と母子#2のマイクロ分析の結果

- 各カテゴリーにおいて、水平の線分が立ち上がっている間、それに該当する反応が生起していることを示す。
- 無関与、相手を見る、叙述的身振り1において、Aは子どもの反応、Bは母の反応である。叙述的身振り2では、Aは母の反応を、Bは子どもの反応を示す。なお、同時注視は母子の反応が同期しているときであり、AとBの波形は一致しているので、一本の線分で示している。

どもは1回目には母親のこの行動に対して応答していないが、2回目には両者の調和的な視線行動のやりとりが見られる。一方、母子#2ではこのような変化は認められなかった。

1回目から2回目にかけて、母子#1の子どもの母親に対する反応が変化したこととともに、2組の

相互作用の様相が互いに異なることも示された。母子#1の2回目のやりとりをカテゴリーに基づき再現すると、以下ようになる。初めに同時注視があり、次に母親が子どもにおもちゃを提示しそれに子どもが応じた直後に母親が子どもを見ると、直後に子どもも母親を見た。その後再び同時注視があり、

しばらく間があってからほぼ同時に2人は互いの方を見た。この一連の反応系列は、母子の同時注視と子どもの交互注視という形で母子間のやりとりに対象が介在している、すなわち共同的関わりの生起が認められた。

考 察

幼い子どもと母親との関わりは短時間の中で生起するという(Bowlby, 1988)¹³⁾。表1に示されているように、子どもから母親への関わりを表すカテゴリ(③A.と④A.)の生起割合は、確かに僅かであった。これらの結果が示すことは、子どもはいつも母親を見ているのではなく、社会的に意味のある状況の中で母親を見るというTomasello(1995)¹⁴⁾の見解と一致する。母子#1の2回目のやりとりの記録から、短時間であっても共同的関わりが生起しているということは、母子間に調和的なやりとりが成立していることを示していると考えられる。

2組の母子相互作用の違いは、結果に示されたように、母子#1の相互作用には共同的関わりが成立し、母子#2にはそれが認められなかったということである。年少乳児と母親の場合、目を見つめ合うというだけの関わりでも調和性が成立するだろうが(Trevarthen, 1979)²⁾、この時期の子どもにおいては、やりとりの生起持続時間がたとえ長くても、それが単一カテゴリでのやりとりでは、母子相互作用は質のよいものではないであろう。Mundy, Kasari & Sigman(1992)¹⁵⁾によると、1歳後半の子どもは大人との間でおもちゃに対する注意を共有する行動を行うとき、大人に対しておもちゃを要求する行

動のときよりも肯定的情緒が多く表出される。つまり、この時期の母子相互作用の質は、同時注視、見つめ合い、物の受け渡しといった様々な関わりの時系列性によって決まるものであり、その良い例として調和的な相互作用を構成している共同的関わりが挙げられる。つまり、行動の生起時間割合という指標では明らかにできないことを、マイクロ分析が明確化可能にしたと言えよう。

母子#1の母親は、1回目の観察でも頻繁に子どもを見ていた。しかし、子どもはそれにまったく反応していない。ところが、2回目では母子間で相手を見るという反応が同期的に生起し、1回目のマイクロ分析と比較すると2回目には同時注視が増加していた。さらに、相手を見るという反応の前後では同時注視が生起している。子どもから母親への能動的な関わりは少ないことから、ここで生起している共同的関わりは、母親によって支持された共同的関わり(Adamson *et al.*, 2004)³⁾であると考えられる。母子#1のやりとりを見る時、支持された共同的関わりの成立は同時注視を前提としていると考えられる。そして、この同時注視が生起するかどうかは、母親の側にかかっていると言えよう。

これまでの議論から、1歳後半から2歳にかけての子どもと母親について、共同的関わりの視点から反応系列を分析する方法は、相互作用の特徴を捉えるために有効であると考えられる。さらには、この時期の母子間に生じる臨床的な問題に対する、観察視点や介入方法を提供する可能性をもったものであるだろう。

注

†1) 観察場面をなるべく自然な遊び場面にしようとしたため、母親同士で会話しながら子どもと関わる状況や、母子の関わりの中に他の母親や子どもが侵入する状況が多く見られた。そのために、ある程度まとまりのある母子相互作用が生起する場面が少なくなった。集団場面での観察とは別に個別場面での母子相互作用も記録されたが、この報告では扱わなかった。

文 献

- 1) Stern DN: *The first relationship*. Cambridge, Harvard University Press, 1977.
- 2) Trevarthen C: Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In M Bullowa (Ed.), *Before speech*, 321-347, New York, Cambridge University Press, 1979.
- 3) Adamson LB, Bakeman R and Deckner DF: The development of symbol-infused joint engagement. *Child Development*, **75**(4), 1171-1187, 2004.
- 4) Dunham P and Dunham F: Effects of mother-infant social interactions on infants subsequent contingency task performance. *Child Development*, **61**, 785-793, 1990.
- 5) Pomerleau A, Scuccimarri C and Malcuit G: Mother-infant behavioral interactions in teenage and adult

- mothers during the first six months postpartum : Relations with infant development . *Infant Mental Health Journal* , **24** (5) , 495-509 , 2003 .
- 6) Cerezo M and D'Ocon A : Maternal inconsistent socialization : An interactional pattern with maltreated children . *Child Abuse Review* , **4** , 14-31 , 1995 .
- 7) Milner JS : Social information processing in high-risk and physically abusive parents . *Child Abuse & Neglect* , **27** , 7-20 , 2003 .
- 8) Crowell JA , Feldman SS and Ginsberg N : Assessment of mother-child interaction in preschooler with behavior problem . *Journal of the American Academy of Child Adolescent Psychiatry* , **27** (3) , 303-311 , 1988 .
- 9) Rosenblum KL : Defining infant mental health . In AJ Sameroff , SC McDonough & KL Rosenblum (Eds .) , *Treating parent-infant relationship problems* , 43-75 , New York , Guilford Press , 2004 .
- 10) 大藪泰 : 共同注意 : 新生児から 2 歳 6 ヶ月までの発達過程 , 川島書店 , 東京 , 2004 .
- 11) Carpenter M , Nagell K and Tomasello M : Social cognition , joint attention , and communicative competence from 9 to 15 months of age . *Monographs of the Society for Research in Child Development* , **63** , 1998 .
- 12) van Egeren LA , Barrat MS and Roach MA : Mother-infant responsiveness : Timing , mutual regulation , and interactional context . *Developmental Psychology* , **37** (5) , 684-697 , 2001 .
- 13) Bowlby J : 母と子のアタッチメント : 心の安全基地 (二木武 , 監訳) . 医歯薬出版 , 東京 , 1993 . (*A secure base : Clinical applications of attachment theory* , London , Tavistock/ Routledge , 1988 .)
- 14) Tomasello M : Joint attention as social cognition . In C Moore & PJ Dunham (Eds .) , *Joint Attention : Its origins and role in development* , 103-130 , Hillsdale , Lawrence Erlbaum Associates , 1995 .
- 15) Mundy P , Kasari C and Sigman M : Nonverbal communication , affective sharing , and intersubjectivity . *Infant Behavior and Development* , **15** , 377-381 , 1992 .

(平成17年 5 月31日受理)

Analysis of Mother-child Interactions in Terms of Joint Engagement

Mitsuhiro SHIMIZU and Yoshihiro KANEMITSU

(Accepted May 31, 2005)

Key words : mother-child interactions, joint engagement, microanalysis

Correspondence to : Mitsuhiro SHIMIZU Department of Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.1, 2005 237-241)